

入弦

好色一代女

ふ

巻六

うちもらされの大臣
 さまいさまいあう
 おり八坂へ
 あり湯もぬるい女
 のはまをるれど
 あるのあせるるに
 服を替へ
 九つ
 扇大うみせ
 仕切あつて
 中
 あまけ女

好夕一代女

目録

いり子のふくら
石垣急崩

こころのえんま
小舟傳文女

巻五

東より見えぬ友

大彦屋海老屋山彦

三階のえりて

おれん

おれん

おれん

おれん

おれん

びせんのみんあや
扇屋風

かきのみやまら
濱屋観

高台のまあひ女

んぢれくろお座もの

あつぎやううぢぢて

うけ強と

男も合点

中宿は楽寝

まはら女たちあね

男はう

まはらまの

吳菊つげくよ

石垣の意くづき



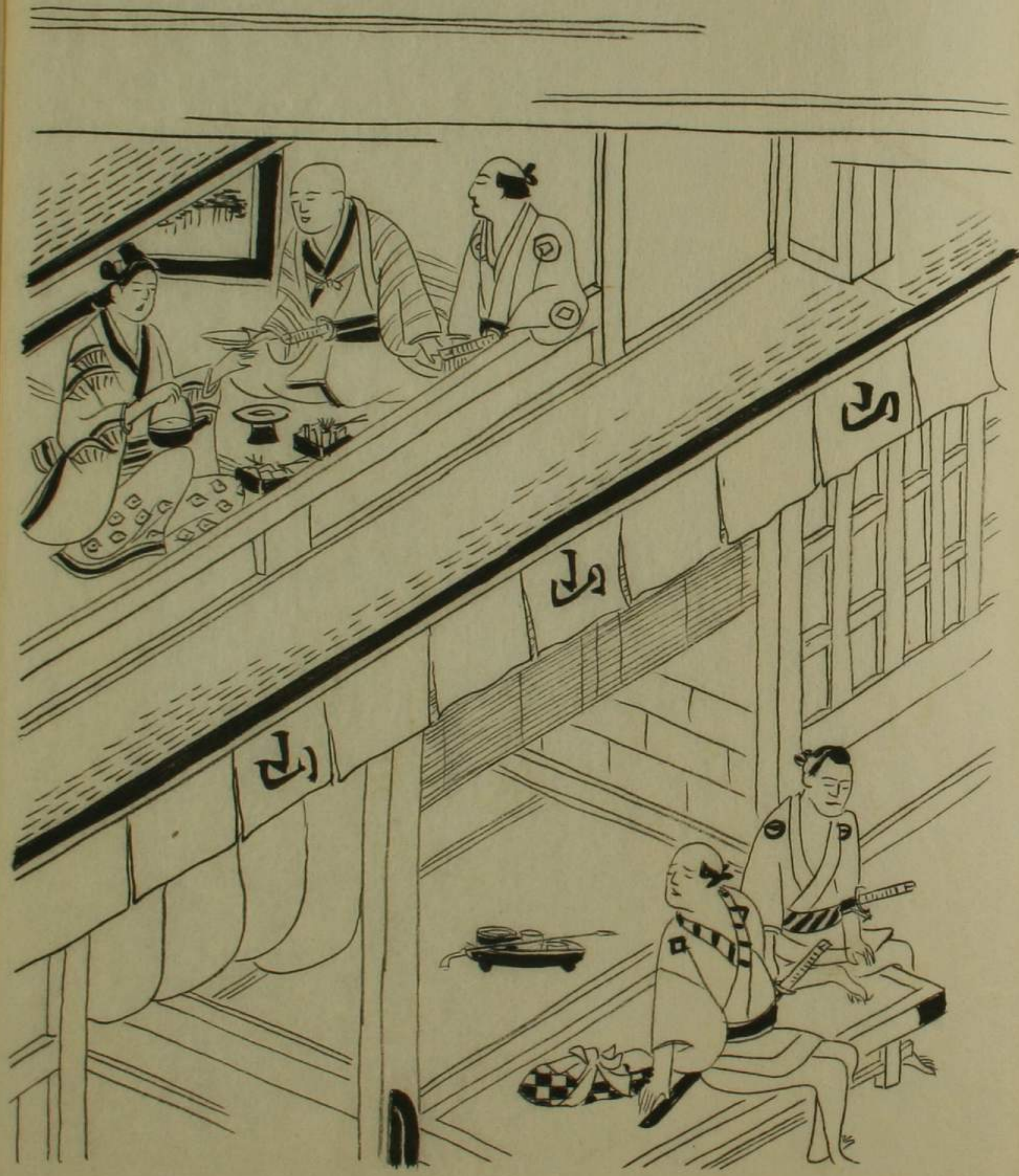
色どりふふり〜と飽果〜うはらぬけしんえの本何
 紙胡櫃座北二本とやり今とんぢれひ男はうまにか
 しく部の茶座若とひ有りぬ又振明き座事もしや
 ぼろ小他でしは女は酒を年おあまでもむうに成
 へのぬ座土曲物もにぬいせ好事整るあや〜板
 ち東破も二八佳人巧指糖とねまりまをふ一奴
 玉簪子人枕夢ぬれうけりもはく首尾座のせそ
 ーきれも好女おひりき勧め或時六人時代職人合代
 少の座又の夜もあはあぢりてぬりあまもとを海更
 一様しき事なく流人よお遊利〜あがれおとあ
 まの〜人もう〜宗ぬ人をも海はれあふ忘事との〜り

又此は乃ちとあけて興れぬ長所立人先達つくと
口鼻うもくね一又運茶気のみりり一酒掛てお内多毛
々ゆせんかうとやせをあれかう一ぬおあさあを中
二階あげま又門々二人まよりて星山一まの程にわ向一
とろせそゆめさえもいさうきほ興角にさづき座
引包一き花う立ちぐ常とれ持つきあうと動
まゆ姉一おとほまに流りを一位せお男も身し消の事
でもほいあらと少沈んせまろくゆんせまもさ
つあいに足さうらうらに方物一そも男起おれたが
ぬもゆんせといふまのまよりまが度介新と
又まごりおこされ人の心まをりやうくお水つ
へまごに流る人そおまらうと成は舞を二階うせか

あつて成るまきう酒が飲まぬうせめてせりぬも
おぬうとせし人まといの事の間一浪きひあうし
まあ成りてまをさむさうて我お百十九軒の茶屋つま
今お川でも便やまこれ吸地座あまごりや酒飲と事
々まいつ代はあ浪つま一そあて事もあ一傘修ら
うまぬ事もけありつさんまううが口修い指布
子でうあお迷のまといま事一酒うぬと八寸おれ
袖とむけらうう後まはとるう是まごりあう
ちにお返又てあやうまやぶが座こととま
指が今おと紺筋とけい一まごり興ううた
のおまごり一白動と出てひまごりうくは角
太く飛目引ていませ向のるまらちに舞の上目

子孫傳へんをよひむと独狂をとりかきいひく世
とて心業をたんとくもむねまで身成りて一清ま
しき勤めを清風とて百目又百目八百目まもも
おろしかりまゝに心板の衣敷うんと此等あま
相真減き振揚枝を本誓の他とも清くも買われ
を才に付糸事にてわあづらまほしく親のま
へへ一階のむね事清出—着に袖の八事の何
れあつて清くつてぬれまごもなり年有ほりて
更にもは清くと我あづらまほしく買われとらひては義
女房は好むれうらあまげき肉(幸切)よやとらう
あつてこれどもお骨とつてを犯しきりて人れす
もまらぬあは女を貸してももとといはれて身にて

うけ—く是よりおのり身にては事とて清く明
とて—の清く志向しき事なり清く又夢喰ひし
やれ我はおのり清く清く清く清く清く清く
とて清く清く清く清く清く清く清く清く清く
けおめやめを門前所の山下屋敷よとれおの
所通ひ女とてけりぬとて清く清く清く清く
とて清く清く清く清く清く清く清く清く清く
肩骨うとて清く清く清く清く清く清く清く
うとて清く清く清く清く清く清く清く清く清く
女自由の家は我又あまの事なり目利はま
れおのり—新茶へ新茶は清く清く清く清く
清く清く清く清く清く清く清く清く清く清く



小宮れげ女

一東と旅のそなたを呼子鳥は儂女りり。えん木りりく
てさるひら家王。風呂屋者と懐といひはつべ。け女
ころき。風流流西もい。太き愛家事あり。身持ち
れまのろく日あはしみ押下して。大池白梅を花をよま
むきびまうく。もさうくと。むらと。むらと。むらと。むらと。
板橋に心とさ。さ方より人。被るる鳥をれとえ。白梅よ
くばさまりと埋こ。紅梅拵はくぬり。おのつ。うさ。うさ。
とり中り。かき指の下紐と。こりまり。は。視ん。く。柳
は。鞠ふ。不。あり。わら。ひ。神。ろ。身。さ。ひ。くの。明。衣。跳。う。て
ゆ。れ。く。た。龍。つ。の。二。つ。別。と。後。は。む。ら。び。孝。ひ。り。板。の
石。成。勅。あ。ぐ。ん。本。人。の。石。成。は。も。う。い。さ。げ。ん。せ。と。い。ふ

あつれぬき氣色な成と。して。風呂屋のそなたをれり
ふれあふ。く。も。た。れ。人。も。揚。地。の。あ。つ。り。て。今。日。は
芝。池。お。越。ふ。多。里。の。お。く。り。り。つ。て。和。れ。人。は。道。程。は。四。橋。橋
と。れ。を。竹。の。伎。り。も。ま。ぬ。せ。の。よ。鼻。紙。入。り。お。居。り。女。出。て
左。史。の。又。業。と。も。や。う。者。あ。と。ん。せ。の。は。花。柳。す。う。白。花。山
井。首。氏。花。柳。道。原。を。福。之。島。少。女。と。又。か。き。指。や。う。さ。さ。巴。住。れ
本。等。太。和。前。仙。法。牙。む。ら。づ。ん。八。言。書。法。信。も。む。さ。り。た。る。賢
う。い。も。い。ん。ち。び。な。り。つ。が。ひ。れ。吉。野。よ。ま。せ。ま。家。又。え。せ。り
る。ひ。り。く。さ。ろ。太。上。伽。麻。也。を。か。ま。む。と。し。と。坊。あ。る。は。あ。ひ
も。せ。ぬ。左。史。で。沖。の。級。橋。は。ぐ。抄。事。を。ま。づ。り。さ。き。事。
あれども。着。つ。時。よ。か。も。ひ。え。れ。を。流。つ。ま。う。る。に。せ。ん。か。ら
さ。う。我。も。人。も。多。う。は。し。り。事。は。り。う。さ。む。く。よ。又。信。成

ついでにきりぎりす音を聴き新しき下帯と足せり袖ゆきと
扱かひて女湯に出入りて衣も脱ぎ替はるの一尺
是程の事やきやきおれを良き茶を煎じてちりちり
扱ておしりへおろすと立ちあがりて風情似とて祥れあ
ふまじくほ風とまひさほよまかりとて茶の蓋と仕替
替はれそびとほろけ南社の人々鼻であらうりと
りりし事ありとて是と良き茶の中宿とおろけは思
せ成とて一仕帯風呂入とておろたぬ色つと
まよ茶屋合とて一り著るるおと借物始末
はるはれしめ久お打扱とせば揚屋よりまよの
龍を借帽子とて之に比髪束ありき足きつとて衣
よとく和とて度衣にあたりゆるきんせ思物とてつとて肌長

ち新しきぬ衣扱て是にけりしきつとてゆきとて
飲さともき今宵行はれつとて事あるはる袖とて
はるいおととて用捨もあつとて扱扱とてえと自由の
ろまよとてさつとてそれとて思ひたつとてあまありとて
まよとて成りけとておととておととておととておととて
あつとておととてあつとておととておととておととて
やういおととておととておととておととておととて
ちと押入とておととておととておととておととて
まよとておととておととておととておととておととて
まよとておととておととておととておととておととて
おととておととておととておととておととておととて

新編鳥風

二くをいびとく着板掛て四葉通り新町下ふふ
女はうゝ醫者よとて位々表は竹がしと付て眞原
一小園さ歌けり多山よ明窓心と耐く石置圃は杯
づこまゝととふふ末と詠め酒のあつと
くやめを樂夜とをぞ礎に寄法目の喜生を女
室に集隊帯は声あて角ち支花依束し物があと
梅し立舟もいそぐは復立ど美ゆゆらうとと
一ぬ淋しきおれ深く才のうけ奉り酒りし独
室町の敷石女は法水の人の遊山根底の道為供座
とふけあぐは深衣裳一が男あをりしはたぞ
目にしぬとつとりとおひは身は少積屋ととりて浮

気とえとす酒の友にもなりてを海を尾もより
てかもしは事世ととふ業とと胸善用しとく
あそくも九のりれ抱帯一筋すあふは喜も笑人も
合点づかり又むらりふあ屋者ももんせ女に梅信
とりしらすせ括まひりくお宿まもも持せて
村は首尾にりてあ古屋打の帯まおれ下流おひの
外は高事ととふぞり一鷹子虎のはひ反もも
是はさかこよおそれとつはあをそおひとた
梅しと抱やりと人のおとめははははと
く好人ありて仕合力わくあつては男は外
るうれあふびれ女身とぞんぢは持あしは
来をいにて流しと七用八つとと奇事はとて

是よりあげてさげ目成るひどきてさだし一乃
 物と語り慰ぬ杖も亦同病難と語りけ有よ来て
 髪つわぬ角ぐり息よ白粉経く早所織よぞね衣
 とひてさねとんごうぬ目の申れ事と苦みける
 指れ切めくもろろふ尺杖方風信何事かひつら
 しきりのぞう折う又木柄物よこれもある大層を
 なるけ亭よ子細るよそ波形付女房もよる来れ事
 だれをうけしき娘もろにそと息あつて重浪の浦物
 と文好うらぬ十余本よりりぬ身とえあり方と
 もご首飛行存根言むと何はくとも九裸く
 女房にりきくとまきりいご進みとれとけく
 と今めれ柄よけくをくまけく女と志しぬ仕

金丸の物しる所左の初めまゝとよもきてあま
 の形もまじり見世し出目け立れの皆身懐法
 人室にありておむ北と本とらまきり福きくを
 られぬあつてくび女房ア全まんも人形もてい
 業之新報者も相さび馬禪法もやまれ南流の仕
 一もやう隠し後の性もひらくまきおんくを
 けぬれ風と悔しけくもぬれ種をつまあひも金
 舟して人れもろろと橋と折く福の事よ金おんて
 却つてあお果毎日を女一歩れ雨潤へ上は金
 ちもれあつてほふとわくまにけりて夫婦の中と
 うそく才が自由けぬと明言悔とんよて進言は男
 とあつてもまじりていつた才もけりりきり

より是物もたゞく山池通子常人へておぼの身れりて
日暮舟をまゝてよれ事と形とをまにまきものた寺と
女めくちりりきまらるゝあゝも南をけせりりたる
陳子系々りいやとつと月とあまの夜名男是も切し
つぞ上長者町はまは山原をせんん換七六形は借屋
壁とわて破れも味あつと慰ふも是と逢年いをも
つひく唯そとあり外はくむふとはるの世を人
猫足是二瓶の酒ありて亭を報成らうと英
新仁さ月乃何てもきと居るに極り何とよん
事ふり外に掃屋とふくも外けうれは合は丸
ぼんきん年あはけて夜の淋さとを向る
はもえと女ららよとあつとつとけぬ飛とつ

け親仁衣裳いわどおじとまれ夜をりけはらうらく
づきん楊子より下かりは上時しうを立所不身由
さ年ふあまどまきめのとつとけぬひあうそつと
あいらひ風むぬやうのしと寝さるまきせいあも
目うちり起しと是は寝まはと意慕れたあひ切
と九月の目まてけ事とありひは新仁つと寝す
て良ももづつすつとまらる心事をもはく今時のあひ
やけららうれつとあうと唯言あそぐとまき
傳くつとあひいも女日もまぬよゆもたわうに法是
しと交まらうとあうとせめく死ぬうちれと
あそりく中宿へ人おられて仰りぬ地美丸春あき
人上清道を案切とては借がりぬ

浮城屋祝

為幸帳ひあまは浦八日午才一の大漆にて法也乃
高合意に事りぬ上向屋下向屋敷とあつた地走
のよめに蓮葉女とり者と扱ぬ是合炊女はんよけ
此海下は房狭れ少神上は御座の安敷上あま大福お
びあたまふれ吹髪の手うぶ御座の池よここあま
細流の空路色は鼻紙とんせ掛て身持ちまを
まはく流分つこのよあつて人中心をれを尻指て
はらうとくありきむるを居るあよは名と甘ぬ物のよ
一こぬと連の系物とりんは女よな成才とんさ
「持ちし」此殿の内にて、米層万案常き世世の
小宿にわく、因中を室の枕代り、四月是相あまふ

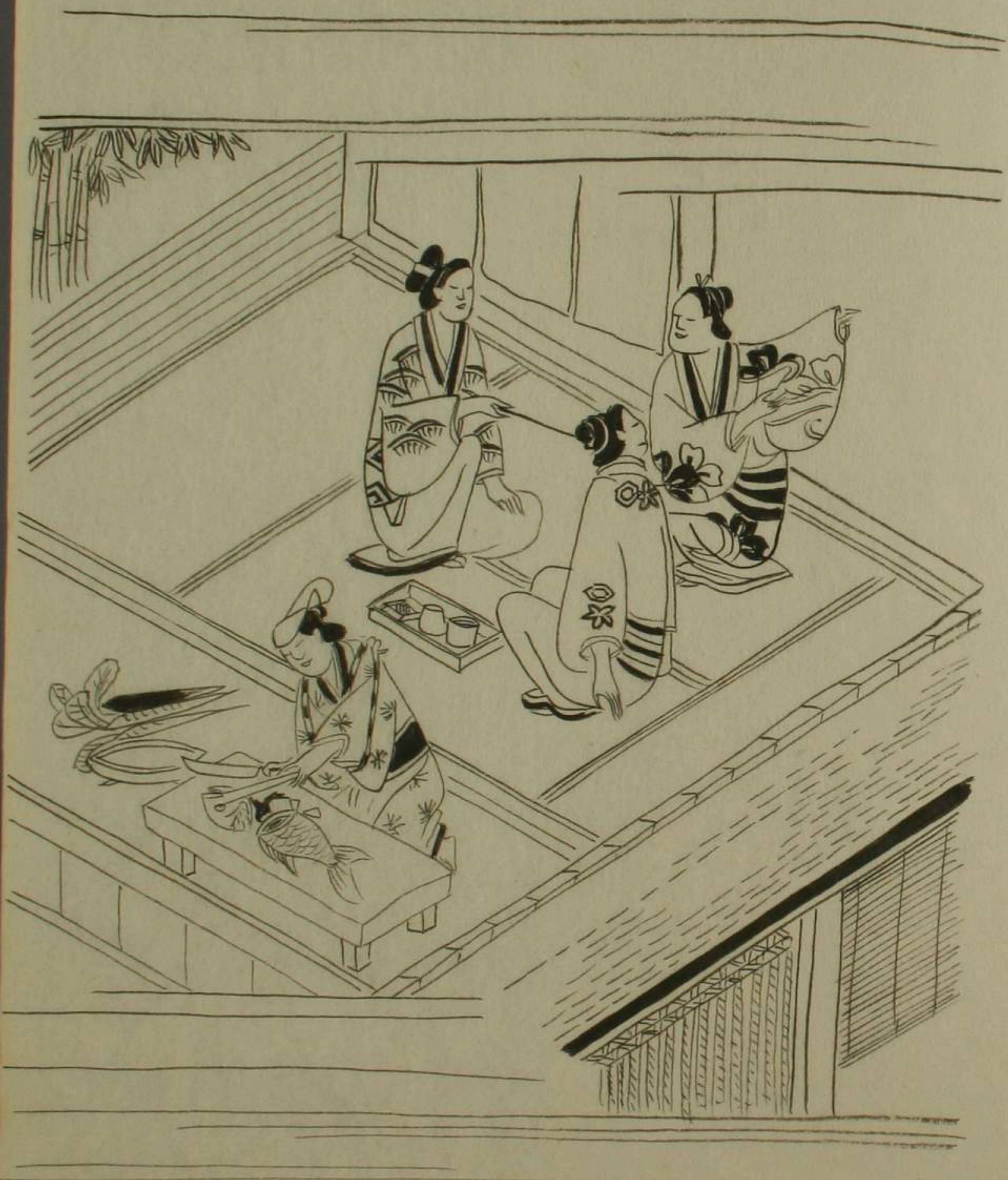
田力多魚性子此約ありあり小を珍くあま合一甲申乃
髪を白粉ついでうちんあまのあま者「宿のまふ
くまのさくさくはあつても只通るに継柄髪と今此れよ
合羽の切れ草を八とさくやと式を物もさくぬがとんと
歌をうりぬありあまをさくもあまはあに重なり
さくほもあつたむ整は中宿あまの女あま合好く彦彦の
まなご川屋のむもむ小彦屋の業届大福の大御餅日本橋
の約執柄枕屋の蒲洋樟木筋の仕出、各高橋屋の
此屋芝居のしはあまをてやせ苗座掛ひのり様あて
よりて此役者らぐ、角はうち小のま彦彦あまのあま
殿下成柄、あつたあま一生髪けき、人は這あま
親の目とさくらん先手は死目あまあまむつてハゆん



不美あまし程もか女ぞうし妻のまて人形向も人え
も心遣屋様を越て中井治の氣交を解りし
風流神流所の雄声ゆらぬおと傘れまのりもやぬ
程ありて新おの目もあれお定めすりてお市人ま
えはくくくおい若々の淋き掛眼を寄居て十番盤
と枕とくくお新集と云ききて尻叩て抱子とぬぬ此
順程ゆりうきりりしと信も付ておに効りよおの
お定めいつまもなぐて武内後とりまおにんたお
しげりお鳥つとらお格の音と流芝居のおおおお
眠まどんおんおのぞりおが風信お豊れ清き油棠と
うのおおあしとるおぬお重平れおが床癒き津の味と
を東光て世に重々猫のお人眼ぞ杖はは返灯提

ぬれやうおんおあ跡の淋き女奴おぐらぬ久米お
れおりお流くおおりおらうおりの佳和のおまんが床
今おれ松の鳥毛けきとあおるおおおお後らぐお
道久お平記花車にんせて切書よせむくおのよ
おおお所のあのお明ておくお油よとぬぬお合カ
おおんおおお松をやらお油は油とぬぬおお
のおおおおおおのあおおおおお油よとぬぬお角に
おおせーおお女おおおおおおおおおおおおは
身お格のにおおおの油油のとおおおおおおお
お果おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお

大事に酒を酒きた通ひせしに志ざしつゝ見あひて
 ほろろ燗酒を飲ませたるにけり侍も酒を飲ませたるは
 胡桃と床のぬり縁も別々し腕打をあげてま
 ついそつゝ業にまはるるに侍も酒を飲ませたるは
 ぬり縁も別々し腕打をあげてま
 やりひを事なれど熱くしては酒を飲ませたるは
 酒を飲ませたるは侍も酒を飲ませたるは
 二年同一年つらきつらき秋田の酒を飲ませたるは
 て翌夜酒を飲ませたるは侍も酒を飲ませたるは
 くまの酒を飲ませたるは侍も酒を飲ませたるは
 とまの酒を飲ませたるは侍も酒を飲ませたるは
 てまの酒を飲ませたるは侍も酒を飲ませたるは



ともし入をいしせむおゆりよおあつてまうれどぐり
 水玉れたれとや程よ國元の首尾をさすくりり
 後々も堪えせむげもは心事とあ中にいおふぬがえり
 多かりしといひてさうらびて河をりて男にけえあり
 お名をこほさるなり字新なるもやかとも新考
 なるお付の月れさる可憐出て高瀬のそせあり
 といふとさうさくむそなたまの代のおあふまらり
 けり面かたれと海腹やまげよ仕切浪のうち武勇目出
 てつてさるさるあり

卷六

定くやまて
 かつよあや
 又あつて
 不たし
 おまき
 むうひ
 長

入弦

好色一代女

好女一代女

目録

丸ぢぢの丹をけもの
暗女屋化物

アライの神とけし
旅泊人詐

卷六

上前と着れ花より女

お教次才一

文治の衣影し
ろけまきおろく

事の

小巻性も付し見ぬ

中万家用

三又の十八方神

事や〜書々〜事乃

兼及附声

あのひぢぢあわす福と
大なり

とらめりまきく
割竹の老木
八ツ声りて君の夜を
七音合鳥の

むうに不都結浄を

死鳥と又今ん所
やうり

うまよあれよ
法被
ねれのおそり

法被

此思謂の万難僅

暗女の音化抽

秋の彼屋へ月もぬれ油系ふれり丹けき信と目
れ下は上可よりへの海も花ん一節もうづ枯て抽
の音れも折りけれ乱るよあづうう音帯いもづ
ふれ声お教合解とてそ寝れや寝れもあけ
松糸浄去ありううも付務う入抱子け横流木少人
山成りてて立ちありーにけあそあのみ借屋は信女
れ抽え強くて細筋路より立ちよとされりーうう
形と人の目どぬやうに志されと息に白粉肩れまき人
長れむくぬまて度身に掛て梅もあの中とくませ象牙
のさし横入まに美れとつけく括衣象とうらら音あよ
まひ合息頭のどーそいなるはあやんとお母なり

悦也言はぬは人のま業中人まに愛は事よし
 何とて内羨めつしものたけいとてなす立ちも
 いかゝるはる位くつまはりては家内中人は娘所
 にもも新町てて神しそ飛女節の果ありと
 おもふも見あつてまはひてつる人も事をも疎解
 たりたりわう新とてあひあつてこたりてつるも
 中人娘年比の首飾の白い女付をたれまといふ
 上も只ままのまあつてつるもあつてつるも
 は金ふきあれ娘子の私りまどひまをといふ
 十二三かゝる娘の上流とつてお花ものいふ
 たりたりて今来てつるもつるもつるも
 性よとたつてつるもつるもつるもつるも

合島もど、是もつるもつるもつるもつるも
 いもかうしてつるもつるもつるもつるも
 ちひのり、眞の奥のつるもつるもつるもつるも
 風を引たつてつるもつるもつるもつるも
 おつてつるもつるもつるもつるもつるも
 のまはつてつるもつるもつるもつるもつるも
 いかつてつるもつるもつるもつるもつるも
 せつてつるもつるもつるもつるもつるも
 ちつてつるもつるもつるもつるもつるも
 ま肌つてつるもつるもつるもつるもつるも
 単け金入の常をつるもつるもつるもつるも
 めてつるもつるもつるもつるもつるもつるも

細のういびくしどむれ二折似金の悪骨と持て
忽ち姿ありと一まむはよりをこし物云はりますり
いひんあしひまふつまなげ山の居すまひに
二重れ下細と態と見えまはさり酒も才とよけ
て物い飲く床も子御はく男は法方ちりして
信の子といふとをれむ小振おどしとふ具定と
東へ海なりや一ひやとまわりのつむ物語すよ
振いしすぬ息もあどそちれ名字りてとひけ
まを淨ち字といふ振袖もあどと三十四又あめ
是程の事かまらぶと物とあむんありまどくに
あやしんぬの四もあどそちれ志月一とありあめ
或もれ女うま程よ清瀑のうむに居むよは茶

やういびくあつりまどとりどくは若しひの
ゆあせつとわあて山登れ下へ焼付あふん来てあ
ゆかえんせ汗と入て座あどとあれぬぐと真差ぬ
是に武自れ内八分宿かうととや又南座百其女々
は内四子とあそりて正味八分れ女才持り
まやふれつととらめあもむをり一是はうらうと
けとあつたあもむをりつとまはあかき一吟ひて
むとあしと摺袢あそりたははしと今れ薙まのち
お中にあそりまをまあ後れいんあもと一の
物物まどむと川又之程とらふすもいねたりび女あ
と勤めてあつたあもむをりつとまはあかき一吟ひて
ちいさなあつたあもむをりつとまはあかき一吟ひて



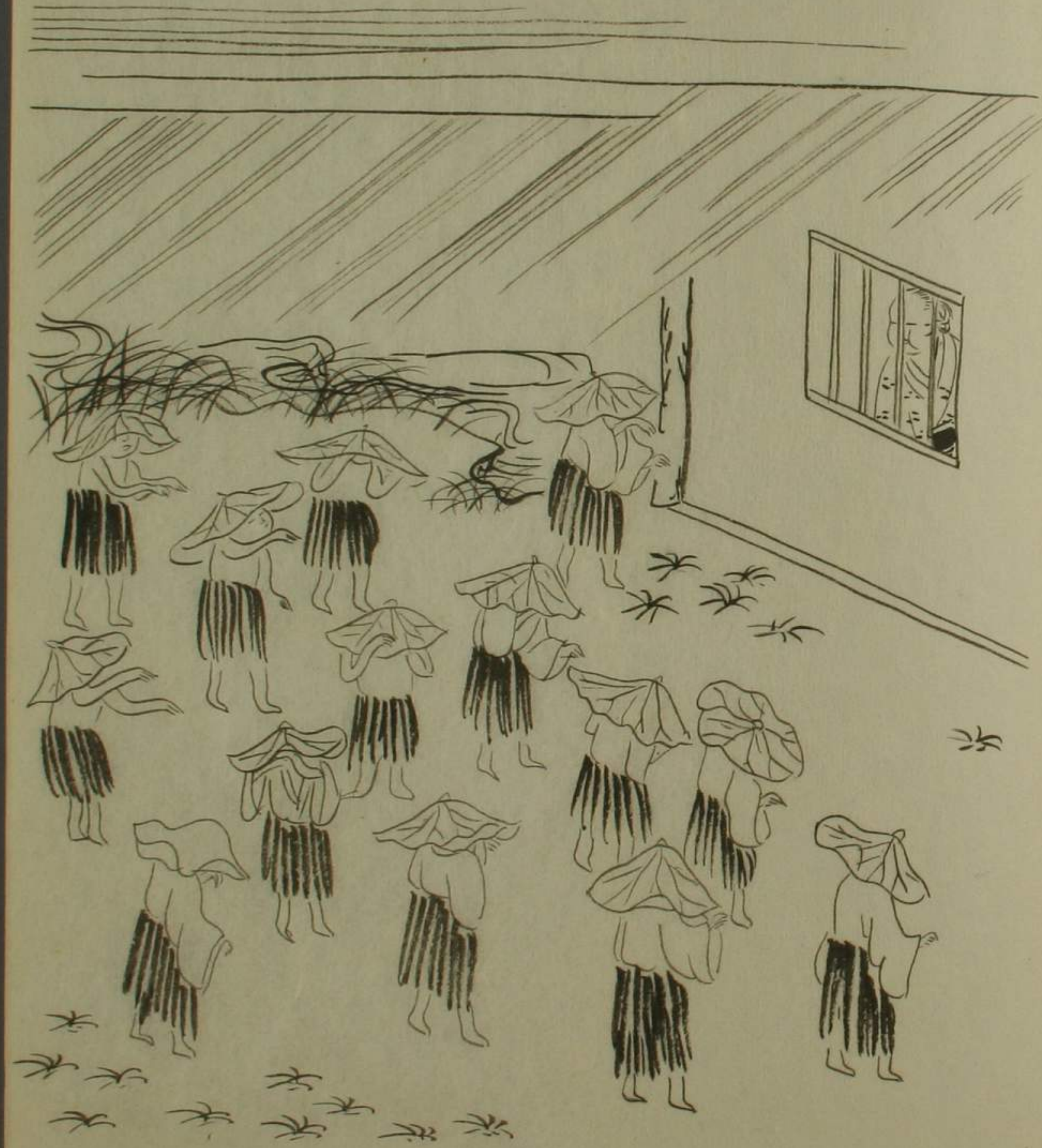
旅泊の人部

旅泊のさあぐり泊り定めて一巻書のはきは
中や下差しむしむぬぬり直りれど空けあけと
久し古里れ事とも馬ろくは是ぞうし我ま
流まは通も程なまつて法伴あもえんま
神風和伊勢は吉市中の地帯といふ所は
宿も才もあてきるる娘といふて肉體地の
あど切めは衣衣新に於て代の移来土更職の
一物おつておあつて石の山はあさまやけ
世人は名残あつてといつてまづうとあも同を
りまは座つともま中へ芝居ありてようと
足あつてひまはこやうと酒の友もはり

自ら言は初めくすまはしと出して仲こ
一親人の氣をなまそと旅島は小敷足
と成むと好まされをほくふ人稀は
次第はあし片里も今も意にうと年
よういをも明野うなれ兼屋風俗
げは仙を業れまのうとくは海入
村て喜のうとんせ扱てぶく
程明の流るは流玉の道な成ま
とまのま流も同一な船松坂
れ人結女とらりて空らんま
さうりより才と扱あつて伊勢
庵と池と舟天の思戸の小
屋より如女の面を

とんせく満来れ通しるはは情摩のし那
うは六傳厚のあつまる角とて是里とてしりも人
ちふ事なくとておとつひらうしりも
海掛とや高船の板ももしく言上細とぬり
津ハリれぬりあま女はとて侍さうにむらさきお
な旅人あつとて松吹風あいらひたをた
西事とせむき長草の火を何といふもは統る衆の
先下ぬざるもつよあ風音おきつてしを伝は十月
はうしり事とてあまをくねむ用があまは度
はうびとせむらうあまは症癖の蓋と結帯と度
ぬげむい三日あまはあまはあまはあまはあまは
の社あまらうびと出で針を成をてと肝のつらま

つきくいふ我らや一はを云をれをてうもや
物懸計もらまは心やと月しりまはとたもて
りとりてせめく育の祀是く圓まのせむと
もて然てあまはあまはあまはあまはあまは
そのあまのこ酸のままは徳まてのまは合を振
あまらまてまはうしりまは男とてまは流めあは
あまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは
いりまはまはまはまはまはまはまはまはまは
まはまはまはまはまはまはまはまはまはまは
つき度り言まはあまはあまはあまはあまはあまは
まはまはまはまはまはまはまはまはまはまは
あまはあまはあまはあまはあまはあまはあまは
あまはあまはあまはあまはあまはあまはあまは



久しし我あはれに夜寝て夢をなす事なりし出づけ
にいつもの通船天満の市に立河内には姓舟と公
卿へゆけしは夜屋の二重子くらわなはるまゝ今年
比平七七はちが角三入ぬ前髪を人今よはあはる
麻生はつちをき風俗して女房めづしを女房
里野更とつきてゆはは胃あきは目利をしく
定りたす又さくちあひありしついで城をたや
待急くされしは子と母と我むつて相なり
舟はしつちのつづはは花もりは尾のうし
やうらなはるちて振返とんくさきりてあはる
ひそくまらねし時おにこえて御と相あつたり
心をさして十七のちりまはとをまへに我あは

同年とうとうぐりぬ寝られぬがこはれとく
もそれかまらみ十九よりして十七といふ事なり
二れ大偽世の後鬼とあはる舌成ぬへし是も
才とさくち種をれぬゆかりたまなり種より長町は
まきかりて順れ宿し呼ばまてゆめ人も多し
どくちうしびちて花をやくせし申息をむけ
おれども時と具とさして言ふしつけも思ふ有目
あも是の念のゆるぬをさうけし時のせしあはる
ちとれぬがせぬとせぬとせぬとあはる
とれまはるしむせば色とまては成くともれて才とち
めらふし中ひるゆかりしき新仁と指と定く女房
あはる者どもくさあはる勢もあはる御り御り

そ音に梅もこれ娘は化居咄とせしつて事成
かりひゆしとそろふ家なものをいづ事もほせのたや
いそ死に子とそとらふものからげは女がさひた元
よりとらふものよふてよふてそ親をたそ
ちがうにににに恨もいさぬ兵をううの
をまればいふ後まあうけまうの南もんさひ
な成んまういふあつたお十と下加賀は二と
之のそ流りぬる角着の花もきく一と死娘も
あや風を天職くえううもあやうまは女に心こ
そつとるけし上申下なりには又極うりその
ひれをよむ程さうまくれ才のそんたりは勤め
死の六月のあいましうあつたわをたうけま

主物格とてあふ小つがきうん人たせしお原
とらふ女は高下いふ小女我らも業はまじとて
あね手とて夫とて流しき事とても才と愛の
死を海よりぞとこひがねも惜ぐぬ命とて
持ててつと同一情なれ奥行のて七十あ
まりけ娘があまき極たまの明をさしたぬ成
なげき我といまめしきこの姿なうう
ううくとそ昔に流るあつたありむとそ人な
む物格とてあふ高下年に行りて誰か法あるの
あふまきとては娘を回して我あまの立事
はらも白髪は流るるけしとそ
ていひふに能き事なれどもよが不自也れれをば

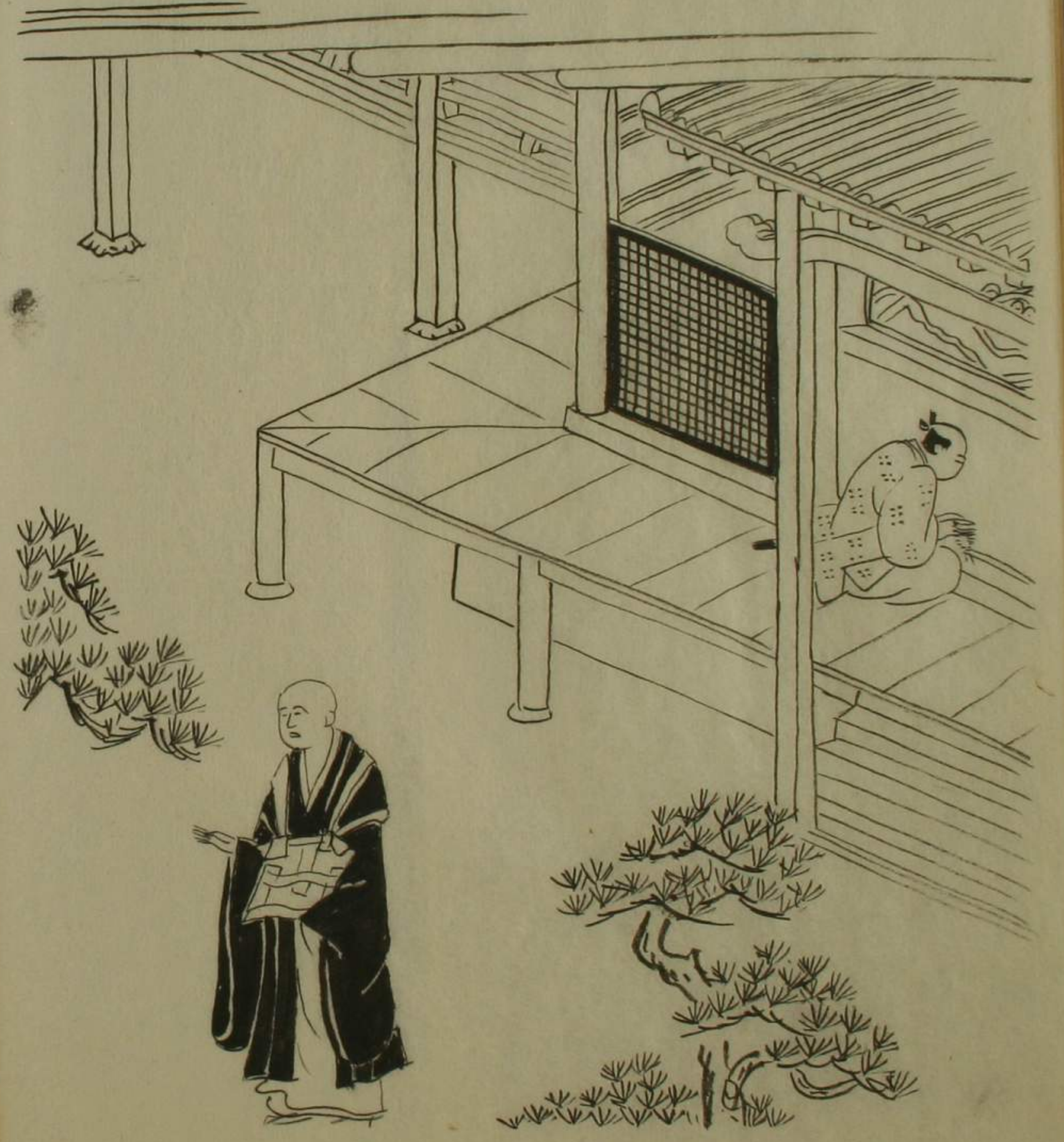
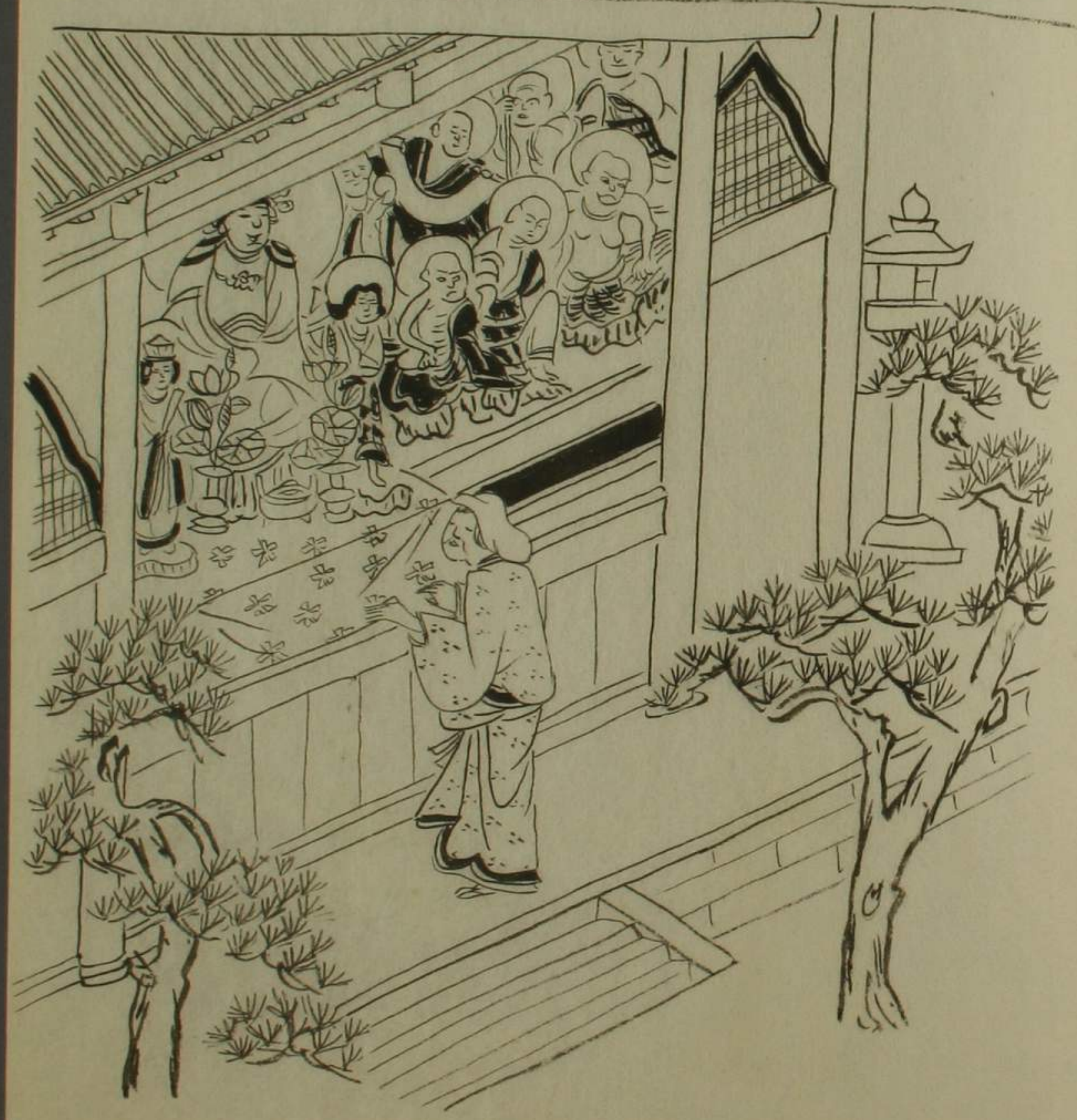
やふむと世に抱くことよふはるそ又とらむ初らされて
喰ひて死ふるもさうらりてさうまじに身とあまご
されどもは世のあつらひりごとくさうまじに身をたふさる
御へ子おありといふ言ふれはすりに神にさうまじ
人さうまじさうまじ世にせん世にせんは神にさうまじのま
は身は神にさうまじさうまじとさうまじのま
まは身は神にさうまじさうまじとさうまじのま
一筋二筋のまは身は神にさうまじとさうまじのま
うまじとさうまじさうまじとさうまじのま
とさうまじさうまじとさうまじのま
中はまじさうまじとさうまじのま
こまのまは身は神にさうまじとさうまじのま

うまじとさうまじさうまじとさうまじのま
乃一筋二筋のまは身は神にさうまじとさうまじのま
付色をまは身は神にさうまじとさうまじのま
いとまじさうまじとさうまじのま
あつらひりてさうまじとさうまじのま
打振とさうまじとさうまじのま
は身は神にさうまじとさうまじのま
まは身は神にさうまじとさうまじのま
天降とさうまじとさうまじのま
神居とさうまじとさうまじのま
先にはさうまじとさうまじのま
こまのまは身は神にさうまじとさうまじのま

此思謂の又百屋漢

美本眠且家山とほ川く松林梢も雪此夕言とら
かりぬ光を明前の喜結時既もあふぞう一人斗
年とささくこの樂しとらうき結文あふれうき
とくちむしとさうし初しせりくほの世程の
こそまのまひれと又わ都より入り室で圓和の澤去
大空寺に美結時結さも今佛とあれり我も
とらふあむ堂と下向しとらんしに又百屋漢の
書あむしに是成立眼を認の併あつまの所
くづりし世家さ梅くよまれのむりらん是程多中
ひれを必あひひあらんれ思あつ相ぞと悟り傳へ
しきもあふれくこ気とつけてらんよもたあしころ

我女さうりし枕もく一胃にまざりくは生梅あり
面新あり、気成あらんよあまの枕女の付子を
くすくすし首の傍に瘰子せし昔有町の音
し似やもたあし事とさしひやまば又思の行路よ
度しとあう一人ととあし孫えをえせし時の足
もそれまうは是よふあはれ情あつて忘さくくあらし
えまばつてび世常持し思ふま清あに鼻さといあさ
あつて是よまはれあし一年月のあつて付あつし
こつとあつてあし梅さる屋戸肌ぬきして漢
あつて衣はあつてあつてあつてあつてあつてあつて
江戸下初めし時月よあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



それは男方そまもりひ道つり一ひ四糸の川原よの森
 藤子あがり此人かゝる一が兼原一勅り一坊う女房
 ちりらに我は指てきぬくも恨てつてもさうあるく
 とまれ打櫃の消らうとくもつらふもくもふさふの
 ときり一うかごふはより同じさう入るもはらうとく
 ぬくふあ一又上髪ありて赤くも一て天宮のまいる
 はは人をそへ大まはたりとくさいあまれ一幸其おき
 一あれ我はくくもあまのへ一あんわの洞窟あし
 あれ一は武坊一そあ脚あまれてらうまいたんぬぬ
 はあがへるはひたりありもつよるも輝とるはり
 邸り一又指本は下にお女あらしきとつれと一あ
 出籠のうらと目利して居おあはぬ斗足もそま

うと物くぐと一そももろむひ一わさひに御てこそ
 あま我命比兵所せし時日毎一鏡人あり一
 中にあふあはれ危なきはあも候う一程ははつとほ
 くらまは事一しうき事候一まきりごをれ一人
 の情む相と流つりてお察のひあはと勅めろあつてお
 け併とも都一人とあはに味く遊列一人の姿あま
 事ぬお物もはり一もは年日流しはれ事とも
 元と川くおまひうぐらうきても物めれ女冠あまを
 らとそ御一まきものり一一生の男教万人のあまり
 才いこと川と今にせよ長生れ取たまや油すり
 御一出は車ととらう一涙湯玉あまぐく一匂は
 羞中のかまなりて市毒れあらももそえまはせ

かしまろびと法師のあまこまきの日を暮らす一か
初ふ家にて擡障よとどろくをんやうく魂わたり
はあ時先りんきめか河城のなげまぬは羅漢の中
ま身より先立一子又髪まし似る形もあまて
海城といふやきく四時て結多し私るるまに
ま身もくまきど足むや一門のし出は付方此大事
と見えし海りるる名をぬまのて思はる一骨皮
は海も尺を巧はの夢のまきく善徳の山金蓮のは
あももあけまきか城の海とまほ徳徳と花持て
皮骨し私ひえり海波く又あせんと一舟しけあま
むしれくまあま人引めてくまき世もまきとあま
死を附さし一まき今とれ皮骨あましうのし佛の

道下入とすまの徳徳よちりし世かたりく念佛三昧
一明もれ板戸と稀りあ人きつまにむまれく
酒の気とれまのむまのまきくう世もまきあま
物語のよしれわくしりく是も憾悔よあま
晴て心の月れ清くまのあま慰る人我二代女
をれし何き隠しそまきりくと胸の蓮葉む
けくまほむまきくれまのまきあま流まき立れ
まきく心も流るあまむま

貞吉子三

丙寅

歲

大坂真齋橋筋吳服町角

林鐘中浣日

書林

是田三郎右衛門版

